

2020. 3. 15 第三主日あかし礼拝
ヨハネ 12:20-28 「一粒の麦として」

聖書

20 さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。

21 この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。

22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。

23 すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。

24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。

26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

27 「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。

28 父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」

はじめに

今日は受難節の第三回目のメッセージです。第一回目はレプタ銅貨 2 枚をささげたやもめの話でした。第二回目はラザロの復活の話で、今日はラザロの復活に関連して、イエスさまの十字架と復活の予告に目を向けたいと思い

ます。イエスさまはご自分を一粒の麦にたとえておられます。麦が地に落ちて死ぬなら、豊かな実を結ぶと言われました。その意味は十字架ですべての人の罪を自らが負い、罪の刑罰としての死を身に引き受けられたことにより、私たちに罪の赦しを与えてくださったことを指しています。そして、イエスさまを信じ、赦しの恵みに与った者にはイエスさまの復活により、永遠のいのちが与えられると約束してくださいました。一粒の麦に込められたイエスさまの思いを受け止め、救いの恵みに感謝するとともに、私たちも一粒の麦となって生きることを求めたいと願います。

1. 時が来たことのしるし

過ぎ越しの祭りの期間には、至る所から多くの巡礼者がやって来て、エルサレムは人で溢れかえります。そこにはユダヤ人だけでなく、ユダヤ人以外の人たち（異邦人）もたくさんいました。多くの巡礼者の中に「ギリシア人が何人かいた」（20 節）とあります。今聖書を読む私たちにとっては、特に意味もないひと言に聞こえますが、このひと言がイエスさまの心にスイッチを入れさせた重要なポイントになっているのです。巡礼に来たギリシア人たちがイエスさまの弟子であるピリポに「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです。」（21 節）とイエスさまとの面会を希望します。ピリポは同じ弟子仲間のアンデレと一緒にイエスさまのところに行き、ギリシア人が面会を希望していることを伝えると、即座にイエスさまは「人の子が栄光を受ける時が来ました。」（23 節）と言われたのです。

前にイエスさまは、「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ 10:11）、「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。」（同 10:16）と言われ、「囲いに属さない羊」、すなわち異邦人にまで救いを届けることがご自分の使命であることを伝えて来られました。そのことが、今ギリシア人の来訪によって実現しようとしていることをイエスさまは確信され、「時が来ました」と言われたのです。

イエスさまにとって「時が来た」ということばは、ご自分がこの世に來られた使命を果たす時が來たとの覚悟であり、使命を果たすための具体的な行動へと導く重要なことばです。私たちの人生においても、「時」の重要性を感じるがあります。重い決断をしなければいけない時、具体的な一歩を踏み出さなければならぬ時、何らかの重要なポイントに必ず「時」があります。以前学びましたエステル記にも、「あなたがこの王国に來たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」(エステル4:14)と、エステルにユダヤ人の救いのために立ち上がるように促されています。イエスさまにとって「時」が重要であったように、私たちにとっても「時」が重要です。その「時」をどのように受け止め、行動するかによって、後の祝福が決まるからです。

2. 時の重要性の前に立つ

誰しも「時」の重要性は理解できます。何事にも時があることを知っています。しかし、その時を目の前にした瞬間、恐れがやって來ます。私たちが重要な時の前に恐れを覚えることをイエスさまはよくご存知です。なぜなら、ご自分がその恐れを経験されたからです。「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。」(27節)で言っておられます。この場面は、イエスさまが十字架にかけられる前夜のゲツセマネの祈りに重ねることができます。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」(マタイ26:39、マルコ14:36、ルカ22:42)とイエスさまも十字架を前に恐れを覚え、その時をやり過ごすことができるならそうしたいと願われたのです。私たちが決断の時や行動の時を迎えているときに恐れを覚えたとしても、それで自分を情けないとかダメな人間とか思う必要はありません。イエスさまも同じ経験をされたので、私たちの恐れを理解し、寄り添ってくださいます。恐れの中に共におられるイエスさまに目を向ける者でありましょう。

3. 落ちて死ぬなら

イエスさまは十字架で死ぬことを麦が地に落ちることにたとえられました。「地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」(24 節) のことばは、裏を返せば、先ほどもお話したように、簡単には地に落ちることができないことを表しています。そのことを別の表現で次のように言っています。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。」(25 節)。これは自分のいのちを愛してはいけないと言っているのではありません。いのちはその人にとって一番大切なものです。しかし、自分にとって一番大切なものにしがみついて手放さないなら、それは握られた手の中でしか意味をなさないということを言っています。手放さないなら、握りしめている本人のためにはなるかもしれませんが、それ以上の広がりはありません。自分のためにはなっても人のためにはならないのです。この自分のためだけに握りしめている姿を、聖書は自己中心の姿として描いています。

イエスさまは私たちに、「あなたが大切に握っているものを手放してごらん」と語ってくださいます。その見本を今これからご自分が十字架にかかることで見せようとしておられるのです。もし私たちが、握っているものを手放すなら、すなわち「死ぬなら」(＝自分のいのちを憎む者は)「豊かな実を結び人々の祝福の基となっていくのです。

4. モデルはイエスさま

イエスさまは私たちの前に、一粒の麦となって死ぬことの難しさと同時にもし死ぬなら豊かな実を結ぶことのモデルとして歩んでくださいました。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」(ピリピ 2:6-8) とあるように、神ご自身である方が人の姿をとって地上に來られたクリスマスの出来事自体が、神のあ

り方を捨てられたことのしるしであり、そのあり方を今度は人生の最期の死においても貫こうとしておられるのです。まさしく、イエスさまの誕生から死までの全生涯が、ご自分のあり方を捨て続けるものだったのです。

私たちは捨て続ける生涯に意味を見出しません。なぜなら、人は得ることに意味を見出そうとするからです。他の人よりもたくさん得る（物、知識、富・財、地位・名誉、権力）ことによって幸せを手にしようと躍起になっています。もしそれが本当に人の幸せなら、競争に勝ち抜き、たとえ人を蹴落としてでも上に行った人はみな幸せになれるはずですが、そうではなさそうです。この世的には人が羨むようなものを手にしていても、幸せではない人たちがいることを見聞きしています。反対に僅かなものしか持ち合わせていなくても、イエスさまのように自分の手にあるものを広げ人々に施すことで、人としての喜びを得ておられる方々も知っています。

イエスさまは一粒の麦の話の中で、「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」(26節)で言われ、イエスさまについて来るように促されました。イエスさまが神のあり方を捨てられたように、私たちも自分のためだけの自己中心の生き方を捨てて生きるなら、私たちは一粒の麦となって多くの人々の祝福のために用いられるでしょう。イエスさまはご自分と同じように生きる器を求めておられるのです。お互い一度しかない人生です。それを自分のためだけに使うのもよし、または自分と人のために使うのもよし。その選択は各自に委ねられています。

まとめ

一粒の麦となって死なれたイエスさまの姿に私たちのあり方を重ねてみましょう。死ぬというのは、今の日本という社会の中においては殉教の死を遂げるような肉体的いのちを捨てることではないと理解しています。もちろん、

いのちを犠牲にするようなあり方も完全には否定しませんが、それよりも「私の考え、私の意見、私のやり方、私の気持ち、私の面子、私の利益」という、手放せない私の何かがあるなら、それを十字架にかけて手放すことが死ぬことだと理解しています。握りしめている不自由から解かれる鍵は、手放すことにあります。手放す自由をイエスさまから頂いて、自分も人々もみんなが幸せになれるように祈りましょう。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」豊かな実を結ぶ生涯の出発に立とうではありませんか。祝福をお祈りします。